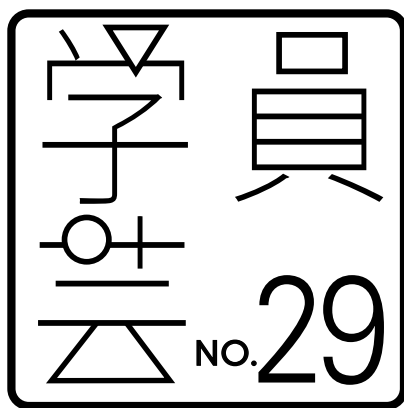




目次

- 2 学芸員をめざすあなたへ | 8K文化財デジタルアカデミー
- 3 学芸員の視点 | デジタルミュージアムとデジタルアーカイブ
- 6 活躍する卒業生 | 皇室に伝わった美術品を幅広い世代へ伝えてゆく—新生皇居三の丸尚蔵館を作る
- 8 学芸員、舞台裏から | 鳥取県での学芸員生活
- 10 博物館実習体験記① | 地域に愛される美術館で | 佐野美術館
- 11 博物館実習体験記② | 魅せる人がつくる、見られる空間 | 出光美術館
- 12 実習記録あれこれ
- 13 学芸員資格取得のご案内 | 学習院大学で学芸員資格をとるには
- 16 information

BULLETIN FOR CURATOR'S COURSE

学習院大学学芸員課程 2025



Since 1877
学習院は2027年で
創立150周年を迎えます



学芸員を
めざす
あなたへ

8K文化財デジタルアカデミー

皿井舞

学習院大学 学芸員課程委員会委員長（文学部教授）
霞会館記念学習院ミュージアム／学習院大学史料館研究員 令和7年度「文化史特殊講義」担当

昨年（2024年）10月8日（火）、一昨年に引き続き、「文化史特殊講義」の一環として、第2回「8K文化財デジタルアカデミー」を開催しました。「8K文化財」とは、東京国立博物館とNHKの共同事業「8K文化財プロジェクト」で制作された文化財の3DCG（高精細画像データをフォトグラメトリの技術を用いて合成した3次元モデル）のことです。まるで自分の眼が顕微鏡になったかのように文化財の細部にまで肉薄することができ、また本来はあり得ない視点からの鑑賞を可能にする大迫力の文化財写真です。これまでにはない新しい文化財鑑賞を開く可能性を秘めた写真と言えるでしょう。

ただ「8K文化財」をNHKの番組や展覧会のモニターで提示する機会はあるとしても、それ以外の用途が見出しにくいのが現状でした。東京国立博物館在職中に「8K文化財」の製作や活用に携わったことから、この「8K文化財」がもつポテンシャルを研究・教育の現場で活かせないかと考えました。そこで東博在職中に一緒にお仕事をしたNHKのプロデューサーにご相談し、様々な条件を整えたうえで、2023年7月21日に、「8K文化財」のストリーミング技術を活用した遠隔授業を、大阪大学、東北大学、早稲田大学との4大学合同で行いました。昨年の第2回目は、東京大学、アメリカのハーバード大学を含めた6大学での同時配信という拡大版として実施することとなりました。

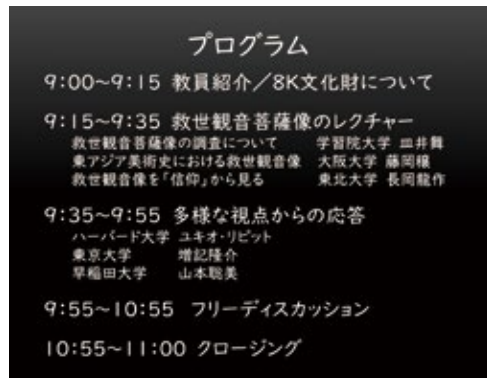
文化財を見る場合、私たちが文化財のある場所（展覧会などで本来ある場所から会場に移されたものであるにしても）に足を運ぶことが必須ですが、「8K文化財」の場合には空間に縛りはありません。そのため、サーバに格納されている超高精細3DCGを同期させることで、多くの参加者が各会場にいながらにして、普段は見ることができない、日本彫刻史上最大の傑作の一つである奈良法隆寺の救世観音菩薩像を間近に観察させていただくことができました。もっとも実施にあたっては、各大学のインターネット環境のセキュリティ面に差があるため、各大学からNHKのサーバにアクセスするにあたってはNHKの技術者の方には大変なご苦労をおかけしました。また空間は越えられるにしても、時間の壁が厚いことも実感しました。ハーバード大学のあるアメリカ東海岸と日本との間の13時間の時差を埋めるのは難しく、日本では午前9時開始、アメリカでは午後7時開始というプログラムが最も現実的にならざるを得ませんでした。

本デジタルアカデミーでは、日本美術史を学ぶ学生たちが、はるか1400年前に造られた救世観音菩薩像の技法や造形について解説を聞きながら、モニター画面でそれらを詳細に観察することができました。時空間の垣根を越えた質疑応答ができるダイナミックな授業は、参加した学生にとって大変刺激的なものだったようです。このように「8K文化財」は教育に様々な可能性を開いていますが、より多くの方が使えるようになるためには、まだまだハードルが高いと思われます。

そこで今年度の「文化史特殊講義」では、専門家ではなくてもその作品の魅力に迫ることのできるプログラムをつくれなかと模索するワークショップを開催しています。作品を紹介するには、何よりストーリーが重要ですので、履修生の皆さんには夏季休暇の時間を使って試行錯誤してもらっています。どのような内容になったかはまた次号でご報告する予定です。



第2回「8K文化財デジタルアカデミー」学習院大学での授業の様子
（2024年10月18日）



第2回「8K文化財デジタルアカデミー」のプログラム

学芸員の
視点

デジタルミュージアムと デジタルアーカイブ

た ら し ま さとし
田良島 哲

東京文化財研究所 客員研究員

学習院大学 非常勤講師 令和5～7年度「博物館実習」担当

■コロナ禍をきっかけに

2020年春からの新型コロナウイルス感染症の流行による社会の混乱は、記憶に新しいところです。博物館や美術館（以下「博物館」）も例外ではありませんでした。

私が勤めていた東京国立博物館（以下「東博」）では、政府の緊急事態宣言によって2月の末から平常展示が打ち切りになったり、開催予定だった特別展が中止になったりしました。職員の出勤もしばらくの間制限され、約3か月にわたって館内での展示ができない状況になりました。

東博の平常展示が長期間にわたってできなかったのは、長い歴史の中でもめったにありません。古くは1923年（大正12）9月の関東大震災、ついで1945年（昭和20）3月の東京大空襲、そして2011年（平成23）3月の東日本大震災と、いずれも歴史に残る大事件の影響です。コロナ禍による休館もそれらと同じくらいの異常事態だったと言えます。

これまで博物館は、建物があり、その中に展示施設があって、観覧者がやってくることで成り立ってきました。「展示・展覧会にぜひ足をお運びください」というのが、博物館側の勧誘のことばでした。インターネットの発達で多くの館がウェブサイトを活用していましたが、そこに載る情報のほとんどは、館内で開催される展示やイベントに関するものでした。

ところが、感染症の流行によって、足を運んでもらうべき場所＝展示室が突然閉じられてしまったのです。単に展示室に人を迎えられない、というだけではありません。特別展を開く際には、作品や資料の貸借が必要になりますが、これも著しく困難になりました。特に海外からの借用は相手館のスタッフの随伴ができなくなって、ほぼ不可能となりました。展示だけではなく、日常の講演会、ギャラリートーク、ワークショップといった対面の行事も、感染の機会となるため、開催できなくなりました。流行の拡大が急であったため、大半の博物館は、このような状況に対して何の用意もできていませんでした。

5年が過ぎた今でこそ、多少冷静にふりかえることがで

きますが、当時、博物館の活動自体がこのままできなくなってしまうのではないか、という恐れを抱いた人は少なくなかったと思います。

一方で対面の手段に頼らず、博物館の存在を訴える試みも、少しずつ始まりました。東博で毎春恒例になっている雛人形の特集展示は2020年2月26日（水）に開会したとたんに臨時休館となり、わずか1日で休館となってしまいました。これまでであれば、運の悪さを嘆いて終わっていたでしょう。しかし、東博の研究者もむだにネットの時代を生きてはいませんでした。ありあわせの機材を使って、展示を担当した三田覚之研究員（現在：奈良国立博物館）が展示室の作品の前で解説をするオンライン版のギャラリートークを撮影し、翌週明けにYouTubeにあげたのです。^{注1）}

この試みは反響を呼び、『美術手帖』や『日本経済新聞』で、コロナ禍での博物館の危機への積極的な対処として、とりあげられました。「オンラインギャラリートーク」と銘打たれたこの企画は、全館的な取り組みとなりました。

コロナ禍で博物館の存立自体が問われる中、東博が存在を示すことができたのは、博物館資料のデジタル化やネット上での情報発信について、それまでにある程度の経験を積んでいたからです。再開館の見通しが立たない中、4月上旬に当時の銭谷眞美館長が公開したメッセージ（注2）では、「オンラインギャラリートーク」をはじめ、後に述べるColBaseやGoogle Arts&Cultureといったネット上のリソースの利用を勧めています。これらのコンテンツの蓄積がなければ、休館中の東博の活動は、とてもさびしく見えたことでしょう。

■デジタルミュージアムとその基盤

デジタル技術を活用して、博物館の機能を支援するという発想は、情報通信技術が発達しはじめた20世紀末からありました。すでに1990年代の後半には、東京大学総合研究博物館が「ウェブサイトを利用したオンライン展示」「デジタル修復」「複数館での情報連携」「アバターが動く

VR展示空間」「ARによる展示解説」「ストーリーミングによる動画配信」といった、近年の技術の原点ともいえる提言を行なっています。^{注3)}

2006年には、当時の文部科学大臣の提案で「デジタルミュージアムに関する研究会」^{注4)}が設けられ、主に公開手法にどのようなデジタル技術が適用できるか、専門家の間で検討が行われました。私もメンバーとして参加しましたが、今では家電量販店で売っている8Kディスプレイも、その頃はNHKの研究所でしか見られない未来の技術でした。

技術が発達する中で、博物館資料自体のデジタル化と公開も次第に進みました。博物館の基本的な仕事は、まず自分の館の所蔵する資料(コレクション)と、その情報を管理、公開することです。デジタル画像の品質と利便性が著しく向上すると、比較的低いコストで大量の博物館資料の画像を作成、管理、公開することができるようになりました。また、データベースの発達により、今では多数の資料から効率よく必要な情報を得ることができます。最近では博物館だけでなく、図書館、文書館、大学、研究機関、自治体などが所蔵する文化的コンテンツを集約、検索できるしくみを

「デジタルアーカイブ」と呼ぶことが多くなっています。

公開情報が増えてくると、個別の館が公開している情報を横断的に検索、発見できることが求められるようになりました。国立博物館・文化財研究所では所蔵品情報を横断できる検索システムColBase(図1)を2017年から運用しています。このような動向を政府の方針のもと、全国規模で展開したのが、国立国会図書館が構築した「ジャパンサーチ」(図2)です。ジャパンサーチは、幅広い分野のデジタルアーカイブと連携し、多様なコンテンツをまとめて検索・閲覧・活用できるプラットフォームで、国内280以上(2025年8月現在)のデジタルアーカイブが検索対象となっています。

■ これからの学芸員に求められるデジタル技術への理解

これからの時代の博物館学芸員には、資料のデジタル化とデジタル化されたコンテンツをどのように管理し、活用するかという、これまでにはなかった資質が求められます。私が学習院大学で担当している「博物館実習」では、

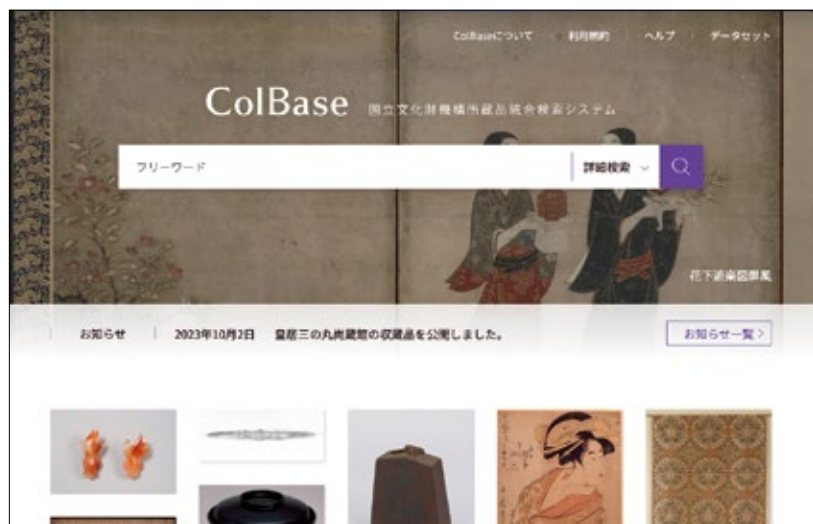


図1 国立文化財機構所蔵品統合検索システム ColBase
<https://colbase.nich.go.jp/>



図2 ジャパンサーチ
<https://jpsearch.go.jp/>



図3 ジャパンサーチの利活用事例(2023年度、2024年度に学習院大学博物館実習の事例がある)
<https://jpsearch.go.jp/usecase>

2023年度、2024年度と全体の約三分の一の時間を、ジャパンサーチを利用したオンラインギャラリーの制作に充てています。ジャパンサーチには、閲覧者が検索した結果を保存し、オンラインで画像や解説を編集して、ネット上の展覧会＝オンラインギャラリーを制作する機能が備わっています。デジタルミュージアムを実現する一つの形です。授業では、この機能を利用して各受講生がテーマを選び、ジャパンサーチのコンテンツから検索して素材を集めます。それを章立てして解説を加え、一つの展覧会にあたるページを構成してもらいます。受講生は、ネット上の膨大な情報から自分の設定したテーマに適した資料を選び出し、論理的に構成しなければなりません。また章立てした意図を説明し、個別の資料については、自分の関心に沿った解説を付けることが求められます。この過程はリアルな博物館で学芸員が行う、いわゆるキュレーションと同じことです。大学の実習では、数多くの原物資料を使っのキュレ

ションはむずかしいですが、ネット上の作業であれば、日本全国あるいは世界中の資料を手元で扱うことが可能です。

また、ジャパンサーチは、コンテンツの二次利用の可能性を重視していますので、ギャラリー制作の中で著作権など知的財産権の処理についても意識させる仕掛けになっています。自分が選んだ資料は、どのような形で使うことができるのかを学ぶことができます。

個人で制作したギャラリーをインターネットで公開するには、運営元である国立国会図書館の許可が必要ですが、この実習で両年度の受講生が作成したギャラリーは、ジャパンサーチ利活用の事例として許可をいただき、公開されています(図3)。ごらんいただければわかりますが、さすが皆さんデジタルネイティブ世代で、ギャラリーが備えている機能を使いこなし、洗練されたページに仕上げている例がいくつも見られます。

今後、高齢化社会が進むとともに、日本の文化を世界に紹介する機会がますます増え、博物館では展示公開をネット上で行う場合が、次第に増えてゆくでしょう。現在は画像とテキストでWebページ上にギャラリーを作っていますが、3次元計測による作品映像をVR空間内の展示室に配置するのも、技術的には手の届く時代になっています。

また、リアルな展示の準備のために、デジタルでシミュレーションすることも当たり前になってゆきます。すでに東博ではコレクション展の展示案は、館蔵資料のデータベースを検索して、展示候補作品のリストを作るところから始まるようになりました。検索しながら自分の発想を形にしてゆく作法を身につけることが大事になります。

一方で、新しい技術は変化が激しく博物館として持続可能であるかの判断は、なかなか難しいところがあります。そこを適切に判断するためにも、デジタル情報の性質、作成や管理の技術、公開の手法などの動向を学び、自分なりの眼を養うが必要になるのです。

博物館でのデジタル技術の活用について、より詳しく学びたい方は、最近刊行された『ミュージアムの未来をつくる 博物館情報・メディア論』(2025年、美学出版)を読んでいたけると幸いです。

注

- 1) オンラインギャラリーツアー 三田研究員が語る、特集「おひなさまと日本の人形」
<https://youtu.be/Cz3aqOlll4M?feature=shared>
- 2) 1089ブログ「東京国立博物館長 銭谷真美より、皆様へ」
<https://www.tnm.jp/modules/rblog/index.php/1/2020/04/08/みなさまへ>
- 3) 東京大学総合研究博物館 デジタルミュージアム
https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKankoub/Publish_db/1997DM/DM_CD/DM_CONT/UM_BOOK/volume3.html/digital/index.html
- 4) 文部科学省 デジタルミュージアムに関する研究会
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sonota/002/index.htm



皇室に伝わった美術品を 幅広い世代へ伝えてゆく ——新生皇居三の丸尚蔵館を作る

きむら まみ
木村 真美

皇居三の丸尚蔵館 研究員

平成30年度 学芸員資格取得

令和2年度 学習院大学大学院人文科学研究科美術史学専攻 博士前期課程修了

◆自己紹介

私は高校生の時、東京国立博物館の特別展で見た神像の展示があまりに美しく、作品の魅力を最大限引き出して紹介されていることに感動して、学芸員という職種に興味を持ちました。実際に学芸員の先輩を多く輩出している学習院大学の門を叩き、学部2年生の授業で発表した時絵硯箱をきっかけに漆工芸に惹かれ、今日まで専門として研究しています。学生時代には、素晴らしい先生方のご指導のもと、頼もしい先輩や励ましあった同級生と調査や研究会を通して切磋琢磨し、かけがえのない時間を過ごすことができました。

◆皇居三の丸尚蔵館について

平成元年（1989）、上皇陛下と香淳皇后（昭和天皇の皇后）は、昭和天皇まで皇室に伝えられてきた美術工芸品を国に寄贈されました。その管理と公開をするため、皇居東御苑の地に平成5年（1993）に「宮内庁三の丸尚蔵館」という名で開館したのが当館のはじまりです。160㎡の小

さな展示室でしたが、これまで100回以上に及ぶ展示を企画し、東御苑に訪れる国内外の方に皇室が伝えてきた美術品を紹介してきました。令和5年（2023）、ちょうど開館30年という節目に展示と収蔵スペースを拡大し、更に充実した展覧会を実施するため、新館を建築することになりました。併せて、運営を独立行政法人国立文化財機構に移管、館名も「皇居三の丸尚蔵館」と改め、新たな一歩を踏み出しました。新館はもうすぐ完成の予定で、皆様へのお披露目は令和8年（2026）秋頃を予定しています。

収蔵品は教科書にも載る狩野永徳・常信《唐獅子図屏風》（国宝）や近年話題の伊藤若冲《動植綵絵》（国宝）が有名です。その他、書跡・絵画・彫刻・工芸・写真など多岐にわたり、中でも工芸品は収蔵品の半分相当を占め、明治を代表する作家たちが技巧を尽くした代表作から、海外との親交によって皇室へ贈られた作品までバラエティ豊かです。私は工芸担当の研究員として令和2年（2020）より勤務しています。皇室に伝わる美術品は一級品ばかりで、中には超大型な作品や日本ではなかなか見ない不思議な作品まであります。そうした作品の調査は大変ですが楽しさが勝ります。

◆学芸員の仕事

私が勤務し始めた令和2年（2020）はちょうどコロナウイルス流行の始まった時期でした。展覧会運営もままならない中、新館の建設のため一時閉館となりました。代わりに当館は令和3～7年にかけて地方各地に、その地域ゆかりの作品を中心に当館の収蔵品を展示する「地方展開」事業を始めました。これまで北海道・宮城・新潟・茨城・山梨・和歌山・広島・香川・宮崎など22か所で開催してきました。このうち、香川県立ミュージアムで開催した「美が結ぶ 皇室と香川」展は私が主担当に関わった初めての展覧会となりました。

香川県は大正の大礼（天皇の即位に関する儀式的総称）で主基国（西側地域を代表して新穀を献上する県）に選ば

れています。当館には大正の大礼で使用した竹内栖鳳《主基地方風俗歌屏風》という高さ2m50cm近くの大きな屏風が収蔵されているので、その屏風を中心に当時の献上品や参列者に配ったボンボンニエルなどを紹介しました。また香川県を代表する神社の金刀比羅宮に協力を得て、金刀比羅宮奥院の襖絵・伊藤若冲《百花の図》を借用し、当館の《動植綵絵》と並べて、若冲の細密描写を間近でご覧いただくことができました。書跡では香川県立ミュージアム所蔵の藤原佐理《詩懷紙》（国宝）と、当館の小野道風と藤原行成の作品を出品し、三跡が一堂に会す展示を作りました。香川県が誇る美術品を当館の収蔵品と合わせて紹介することで、地域の方だけでなく遠方からのお客様にも「香川にこんなお宝があることを初めて知った」「香川の魅力を知った」などと感想をいただき、地方展開の意義を感じた展示を開催することができました。

◆新館オープンに向けて

当館は今年の春まで、半分だけ出来上がった新館を使って展覧会を開催していました。現在は1年半の休館期間をいただき、新館全面開館に向けて準備中です。全面開館すると展示面積は約1,300㎡にもなり、旧館の約8倍となります。また広いエントランスや映像を投影できる部屋、ミュージアムショップも備えられます。美術館・博物館の立ち上げや施設の建て替えなどはなかなか立ち会えることができない貴重な機会です。当館の新館は令和元年（2019）に着工し、令和5年（2023）に半分完成しました。バックヤードの部屋の割り振り、展示室の壁面ケースや独立ケース、照明の仕様検討など学芸員実習でも味わえない経験を就職してすぐにしました。特に大仕事で記憶に残っているのは、旧館解体に伴って、すべての作品を安全に新館に移送したことです。旧館は2階建ての建物で、

1階に1つ、2階に2つの収蔵庫がありましたが、エレベーターはなく階段で作品を下ろさなくてはなりませんでした。書棚や大型花瓶など大型作品の移送は特に緊張しながら、新収蔵庫までの長い道のりを学芸員・運送員が一丸となって安全に移送できた時には大きな達成感を感じました。

また皇居三の丸尚蔵館になるにあたって、新たに教育普及事業も企画運営していくことになり、私が所属する課がその担当となりました。新館が半分完成していた際は、限られた空間でできるギャラリートークや子どもの対話型鑑賞会、外国人向けトークを企画し、作品の見方を伝える動画作成も行いました。全面開館ではワークショップや作品の魅力を伝える映像等コンテンツの充実も考えています。皇居にある美術館という、ちょっと行きにくい、と思われがちな当館ですが、老若男女それぞれの来館者が楽しめる普及事業を企画し、門を広く開いた魅力的な施設として多くの方に愛されるようにしたいと思います。ぜひ大学生の皆さんも学びと遊びに来てください。

◆学芸員を目指す学生のみなさんへ

世の中に学芸員資格を持つ方は多くいますが、その中から実際に学芸員として活躍できるのはほんの一握りという現状です。学芸員までの道のりは困難なこともあると思いますが、自分の専門に固執するだけでなく、ぜひ多くのことに興味を持って実際に足を運び、学生の間に様々な経験や体験、人とのつながりを自分の中に蓄積してほしいと思います。一見無駄なようなこともどこかで縁につながる可能性があります。たとえ挫折したとしても文化芸術の理解者がいることが私たちの励みになります。まずは研究も遊びも交遊もアルバイトも、全てを楽しみながら一歩ずつ頑張ってください。



皇居三の丸尚蔵館 外観



新館での展示風景

鳥取県での学芸員生活

やまもと りゅういちろう
山本 隆一朗

鳥取県立博物館 学芸課 歴史・民俗担当 主任学芸員
平成24年度 学習院大学文学部史学科卒業

自己紹介

私は、平成20年（2008）に学習院大学文学部史学科に入学しました。日本の南北朝時代に興味があり中世史ゼミで学びました。ゼミでは「吾妻鏡」という史料を講読し、一字一字と向き合い、議論が深まるような準備をする訓練を受けることができました。卒論では、熊本県の武士である菊池氏についての論文を書きました。その後大学院では、研究テーマが深められる九州の大学院に進学しましたが、卒業論文で研究したことは形を変えながら、修士論文・博士論文にも活かされました。

鳥取県立博物館

勤め先である鳥取県立博物館は、昭和47年（1972）開館の総合博物館です。豊田秀吉の攻城戦で知られ、鳥取藩32万石の政庁である鳥取城跡に立地しています。今年、鳥取県立美術館の開館により美術部門が独立したため、5月



鳥取県立博物館の外観

1日から自然史と歴史・民俗の二分野の博物館として再スタートを切っています。コレクションとしては、県内の動植物・地学に関する標本類や、歴史・民俗・考古資料を数多く所蔵しています。私の所属する歴史・民俗担当の資料の中には一万数千点を数える鳥取藩政資料があり、補修作業やボランティアによる解説が進められ、「とっとりデジタルコレクション」というデータベースで資料画像の公開も行っています。

職場の業務について

平成28年（2016）4月、現在の職場に赴任しました。私

自身は採用試験で訪れるまで鳥取県に滞在したことはなかったのですが、県内の地理・歴史・雰囲気もほとんどわからないような状態でのスタートでした。博物館学芸員という仕事は保存管理・調査研究・展示などの博物館資料に関する業務に加えて、館を訪れる様々な関心を持つ人たちにも対応します。くわえて、生涯学習や学校教育の支援、市民の潜在的なニーズを拾い上げるような講座も企画しており、館外での活動も多いです。鳥取県は規模が小さく、県立館としては他県に比して市民との距離が近いのもあって、思った以上に県民密着型の仕事であると感じています。

心に残った仕事

令和3年（2021）度には企画展「とっとりの乱世——因幡・伯耆からみた戦国時代——」を担当しました。当館では戦国時代をメインテーマにした展覧会を開催したことがなく、当初は全国の資料を広く借用して展示しようと計画していました。ところが、集荷・展示の時期はコロナ禍の最中であり、県外移動の自粛などが呼びかけられていました。結果、中国地方以外の借用を全て諦めることになってしまい、動揺したのを覚えています。そこで、展示資料を県内の資料を中心としたものに切り替え、何とか開催に漕ぎつけることが出来ました。思うような展示内容にならなかった部分はありましたが、近年刊行された『新鳥取県史』で確認された県内の新資料を数多く展示できたという側面もあり、企画展というものの奥深さを感じました。鳥取県に赴任して以来、鳥取県の戦国時代をビジュアルにイメージできるものがないという問題意識をもっていた



令和3年度企画展「とっとりの乱世——因幡・伯耆からみた戦国時代——」の展示風景



制作した山中幸盛（鹿介）のイラスト（イラストレーター：獅子猿）

ので、この企画展では観覧者に鳥取県の戦国時代の印象が強く残るものを広報に使いたいという想いをもっていました。そこで、戦国武将などのイラストで著名なイラストレーターである獅子猿さんに、展示内に登場する武将や資料のイラストの制作を依頼しました。イラストの制作にあたって、獅子猿さんと何度もやり取りをしながら細かい修正をお願いし、こだわりをお伝えし、とても良いものが完成しました。特に山中鹿介（幸盛）のイラストは、鹿介が最期に着用していた鉄錆十二間筋兜（吉川史料館所蔵）を登場させ、鹿介の不撓不屈な生涯を表すようなメインビジュアルとなり、展覧会をワクワクさせるものにしてくれました。

また、この企画展の調査では、忘れられない出会いもありました。鳥取藩士家旧蔵の中世文書を探す中で、鳥取藩士・加須屋家の文書を調査しました。所蔵者宅の客間でご挨拶をしている時に、小壁に掛かる額装の古文書に明らかに原本の羽柴（のちの豊臣）秀吉の花押（手書きのサイン）が見えていました。すぐに、「失礼ですが、あちらの文書はお持ちの古文書の原本ですか？」と伺ったのを思い出します。果たして、その文書は近世期の地誌にも写されていない、新出の秀吉の判物でした。その後調査を開始すると、播磨国の武士に関する新発見の中世文書を次々に判物箱から取り出すという得難い体験をしました。中世史の研究では多くの古文書を使用しますが、翻刻されたものを使用することが一般的です。よもや自分が中世文書の発見に立ち会えるとは思っておらず、この時の心が震えるような感動は今でも忘れることはありません。

学芸員の任地について

学芸員として働く際の重要な問題として、“どこで働く

か？”があります。博物館・美術館は全国に点在しており、自治体の採用なども考えると、幅広い募集に応募した方がキャリア形成において有利です。自分自身が千葉県出身でありながら鳥取県で採用されているという背景があるので、自分の生活圏を離れて学芸員として働くことについてその注意点と魅力について書きたいと思います。

まず、採用の暁には引っ越しが必要になることがほとんどで、今までの自分の生活基盤から切り離され一からそれを作ることになります。例えば、地方都市では自動車の運転なしでは実質的に生活が成り立たなかったりするなど、都市圏の常識が通用しないこともあります。また、自分の専門テーマの研究を続けていく場合、図書館の収蔵状況や大学との物理的な距離が研究の障壁になることもあります。くわえて、些細なことのようには思われますが、人間にとって絶え間なく影響を与えてくる気候や風土も重要です。これらの条件に付いては、採用の前にきちんと情報を収集することが大切だと感じます。

一方で、地方の学芸員を目指すことには、メリットも多くあります。例えば、地方の学芸員は地域史の最前線に立ち、重要な資料を調査し、先述のような発見に立ち会うことがしばしばあります。他にも、講座などの準備で山城・荘園の故地・遺跡を踏査し、藪を漕ぎ（草をかき分けて進むこと）、地元の人たちとコンタクトをとったりする機会も多くあります。こういった調査を行うと、地域史にはまだまだ手付かずの重要なテーマがたくさんあることを痛感させられ、宝探しのような楽しさがあります。

また、赴任地で自分が何をしたいかを考え生活をデザインし、それぞれの地域の持つ良さを生活に取り込むことができれば、その豊かさを実感できていると思います。例えば、鳥取県は山と海が近いため、釣りが趣味な私は毎週末のように足しげく釣り場に通っています。地方での就職を機に、自分が今まで出来なかったことに挑戦するチャンスも数多くあります。

学芸員を目指すみなさんへ

最後になりますが、学芸員という仕事は、大きなプレッシャーがかかることもありますが、自分が身に付けてきた知識や技能を活用し創造性を発揮できる仕事です。また、その専門性・創造性ゆえに、学芸員の業務については現場で悪戦苦闘しながらノウハウを得ていくことになると思います。難しい問題に向き合う時、大学・大学院時代に学んだり展覧会を見学したりして得た気づきがピンチを救ってくれたり、新しいアイディアを出す突破口になることもあります。学芸員を志されるみなさんは、様々なジャンルの博物館・美術館・文化施設に足を運んでみてください。

博物館実習 体験記 ①		
令和6年度 学習院大学文学部史学科4年 (令和7年度 学習院大学人文科学研究科 史学専攻修士課程1年)	館園実習先 佐野美術館	
たしろ たける 田代 健留		
はじめに	実習内容	こと、資料的意義を言葉で表現すること、作品の魅力の説明することなど、博物館や美術館は、来館者に対して何かを伝える場所となることを再認識しました。資料への理解を深めていくと同時に、それを分かりやすく、魅力的に発信していくことが、社会に開かれた博物館となるために不可欠であると学ぶことができました。実習期間は、絵本の展覧会の最中でした。来館した方々はその作品に魅了され、絵本を手に取り楽しみ、また懐かしんでいました。作品の世界観が、しっかりと鑑賞者に伝わっていることに感銘を受けました。
館の概要		おわりに
静岡県三島市にある佐野美術館の開館は、昭和41年(1966)です。国宝である薙刀や日本刀の名品、金銅仏をはじめ、東洋の古美術が中心的に所蔵されています。館に隣接する「隆泉苑」では、富士の湧水を取り込み、大きな心字池を配した回遊式の日本庭園を楽しむことができます。また、その園内にある日本家屋(登録有形文化財)は檜や桜の木材を効果的に用いた趣深い造りとなっています。年に6〜7回程度、館の所蔵品に限らない幅広い展覧会が開催されます。また毎年8月1日は、創立者の佐野隆一氏の生誕記念日として、無料での入館日となります。	適切に資料を取り扱うために、多くの経験を積まなければならないことを実感しました。掛け軸を木箱から取り出し、壁に掛け、再び箱に収める作業は、大学の授業でも繰り返し実践したものでした。しかし、なかなかうまくできません。掛け軸の左右がずれることなく巻き戻すことはとても難しく、収納する際の手順にもまごついてしまいます。当たり前のようにきちんと綺麗に展示されている美術品の背後には、学芸員の方々の数え切れないほどの経験と高い技術力があるのだと気づきました。また、実際に美術館のお仕事を体験させていただく中で、伝える力を深めていくことがとても大切であると考えました。展覧会やイベント企画の趣旨を可視化する	佐野美術館が開館した当時、県東部には現在のように博物館は建ち並んでいませんでした。しかし地方にいながらも、三島市周辺の方々が歴史的資料や美術品を楽しむようにと、佐野美術館は多様な展示を企画してきました。それが今も、館の所蔵品に限らない多様な展覧会を開催する所以です。展覧会には、年配の方や家族連れ、中高生まで、とても幅広い世代が来館していたことが印象的でした。開館当初の理念は現代にも脈々と受け継がれ、美術館は地域の中に優しく根を張っていることを実感しました。素晴らしい環境で、多くのことを教えてくださった佐野美術館の皆様に、心から感謝いたします。本当にありがとうございました。
		
図1 佐野美術館外観	図2 佐野美術館庭園 隆泉苑	

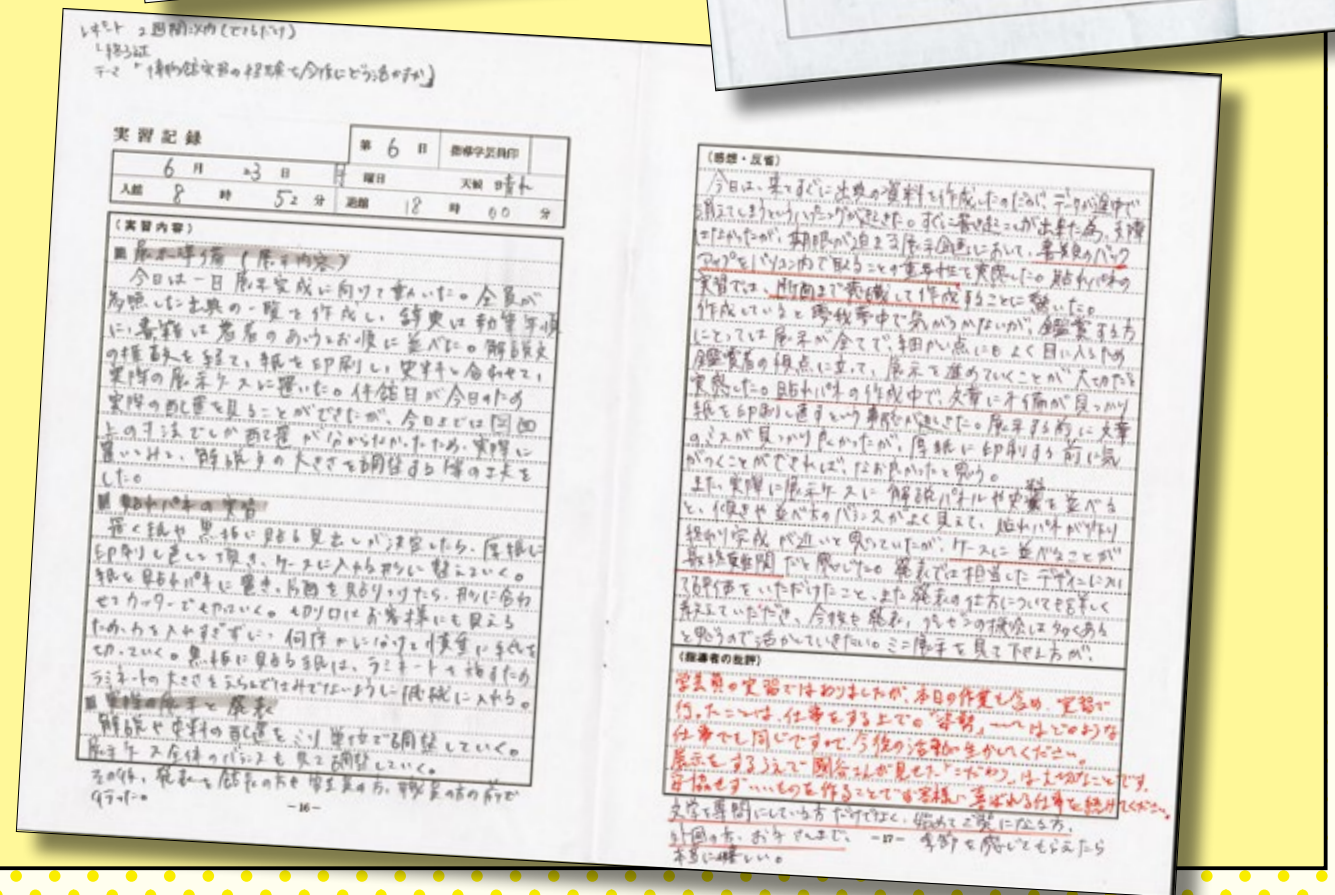
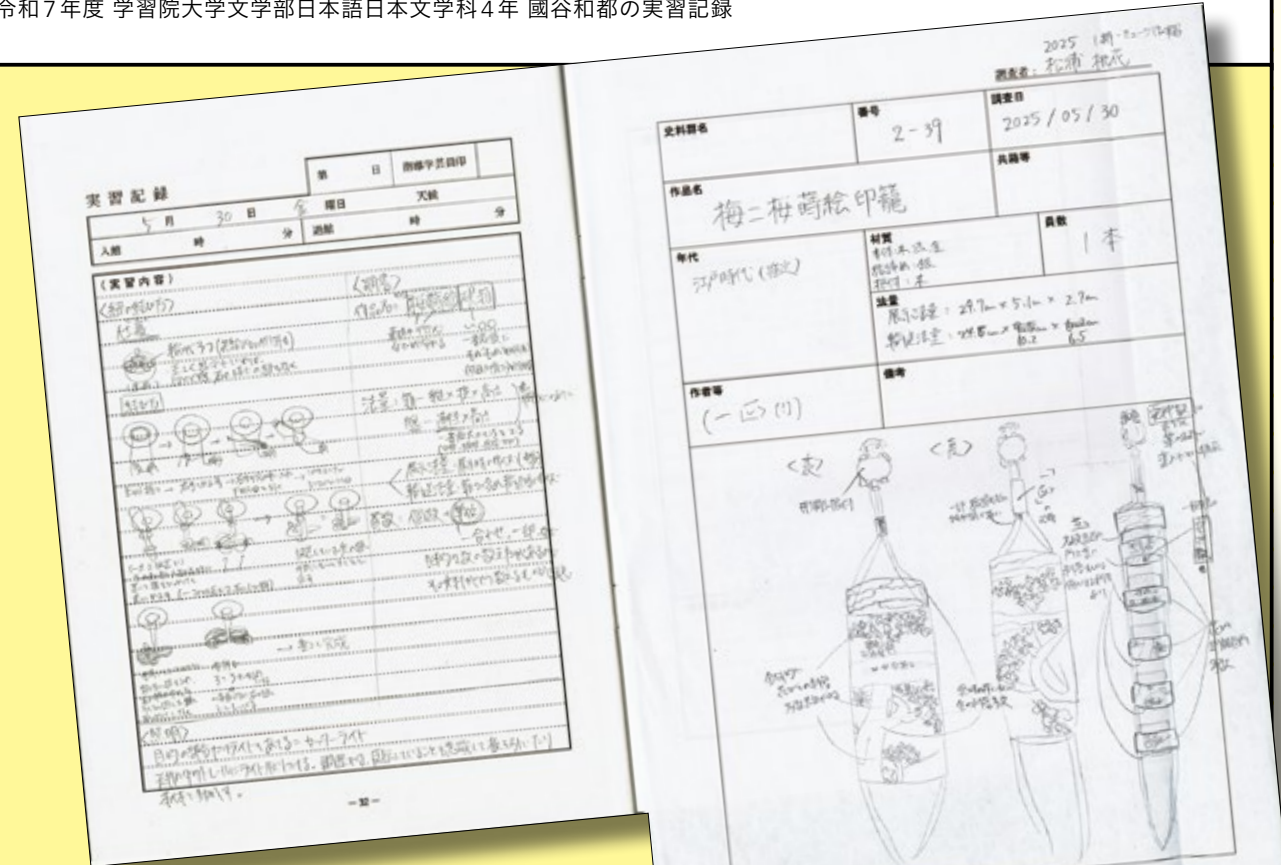
博物館実習 体験記 ②		
令和6年度 学習院大学文学部哲学科4年 いとう さくら 伊藤 さくら	館園実習先 出光美術館	魅せる人がつくる、見られる空間
はじめに	実習内容	
私が今回、博物館実習でお世話になったのは出光美術館です。大学生となっからは、展覧会毎に足を運んでいた縁ある、そして、お茶室や陶片室など、私自身が特に心惹かれ、研究している分野を専門とされている出光美術館に実習生として関わらせていただけたことは本当に貴重な体験となりました。	1日目 (出光美術館にて) オリエンテーション、2日目から取り組む実習に関する企画の意見交換 2日目 (2日目以降は中近東文化センターにて) 図書館・収蔵庫の見学、展覧会企画に関する講義、資料の取り扱い 3日目 企画展示に出品する作品(実習では、当館所蔵田中文庫の模写本を使用)の下調べ、調査、選出 4日目 作品調査、卷子展示に使用する巻芯作成、キャプションのレイアウト、作品の配置決め 5日目 展示準備、キャプション・カラー図版のパネル・出品リスト作成→企画展示発表→撤収、実習の総括	図2 展覧会回覧の様子 成功に関しては、見る側の意識も重要であり、日本の古美術と西洋の近現代美術の展覧会での来場者数や収入の差に留まらず、その現状は目を背けてはならない問題で溢れています。
実習館の概要		実習を終えて
出光美術館は、出光興産の創業者であり美術館創設者の出光佐三が蒐集した美術品を展示公開している美術館です。昭和41年(1966)に東京・丸の内に開館した本館の設計は、東京国立博物館東洋館やホテルオークラなどの建築を手がけた谷口吉郎氏によるもので、同設計の茶室「朝夕庵」では、季節を感じるしつらえを楽しむことができます(※現在、出光美術館は帝劇ビル建替に伴い令和6年(2024)12月をもって一時休館しています)。また、今回実習館として赴いた中近東文化センターは、昭和54年(1979)、三笠宮崇仁親王殿下のご発意と出光佐三の協力を得て三鷹に開館しました。当館では、タイルや土器・石器、ガラスなど様々なコレクションから中近東の歴史、文化の流れを学ぶことができます。	今回の実習で、実習生である私たちに課せられたのは、一つの展覧会を企画し、展示作業から公開、そして最後は展示した作品を元の場所に戻すところまでを行うことでした。テーマを決めるに際しての意見交換をしながら、こうして様々なバックグラウンドを持った人々が集まり、一人では思いつかない試みをそれぞれの視点を持ち寄って語らう今この時から展覧会はその産声を上げているのだと感じてなりません。そこから、どの作品を展示するのか、選んだ作品にどのような言葉を添えるのか、さらには展示するにはどのような道具を用いるのが最適かを、全体に目と心を配りながら進めていった先に形を成すのが一つの展覧会なのだと考えながら実習にあたっていました。美術館の意義は、「見せる機会を提供する」ところにあり、作品そのものとそれらが「見られる」空間の関係性こそ、学芸員として仕事をする上で常に意識しなければならない事柄です。展覧会の商業的な	展覧会には始まりがあり必ず終わる日が訪れます。いずれは消えてなくなってしまうものであるからこそ、受け取る相手、伝える側、双方にとってより良くありたい。その点を深く考えた先に出来上がった展覧会でこそ、心に残る作品との出会いがあるのではないのでしょうか。学芸員の仕事はすべて作品に繋がっている。あらゆる作品をどのように組み合わせ、魅力を活かし、一つの展覧会をつくりあげるのか。その取り合わせの妙を最も近くで、ほんのひとときだけでも、体感することが叶ったことがとても嬉しいのです。これから実習を経験する皆さんも、多種多様な魅力に溢れる美術館、博物館にとどまらず、文学館や科学館も受け入れ館として実習館として手を挙げてくださっている環境に、胸が高鳴っているのではないのでしょうか。この実習が実り大きなものとなりますことを卒業生の一人として願っております。
		
図1 展覧会チラシ・会場挨拶パネル		

実習記録あれこれ

資格取得の総仕上げとなる「博物館実習」。なかでも館園実習は、博物館の現場で現役の学芸員の方に指導を受けながら、学芸員としてのさまざまな実技や知識を教わるチャンスです。実習に参加した学生の記録から、その様子を見てみましょう。

上: 令和7年度 学習院大学文学部ドイツ語圏文化学科4年 松浦桃花の実習記録

下: 令和7年度 学習院大学文学部日本語日本文学科4年 國谷和都の実習記録



学芸員資格
取得のご案内

学習院大学で 学芸員資格をとるには



学芸員課程について

将来、博物館で働くことをめざす学生は、学士の称号を得て、必要な授業の単位を修得することで、博物館の専門職である“学芸員”の資格を取得することができます。学習院大学で、その運営を担当するのは学芸員課程委員会、窓口を担当するのは学内の博物館相当施設である学習院ミュージアム内に設置された学芸員課程事務室です。

1981年(昭和56)に学芸員資格取得がスタートしてから40年近くを経て、資格をとった学生数は、3,900人を越えました。もちろんそのなかには、博物館の現場へ旅立っていった卒業生たちが数多くいます。各館で活躍中の学芸員を中心とする顔ぶれ豊かな講師陣による授業。現場の大学博物館として年間数十名の実習生を受け入れ、さらに日々現役の学芸員たちが学生からの相談に応じる学習院ミュージアムのサポート。

このような学内協力体制と、なにより館園実習を受け入れてくださる全国の博物館・美術館との関係を大切にしつつ、今後もさらに充実した授業運営をめざします。

1 学芸員資格を取得するためには

- ① 学士の称号を得ること
- ② 「博物館に関する科目」の必要な単位をとること

・必修科目19単位すべて

・選択科目8単位以上

(文化史、美術史など9つの系列のうち、最低2系列に
わたり8単位以上、各系列4単位以上)が必要です。
※詳しくは、最新のシラバスや手引を確認してください。

最短で2年で資格を取得することができますが、卒業に必要な単位とは別なので、4年間かけて計画的に単位をとることをおすすめします。必要な単位をとると、学部卒業と同時に資格が取得できます。(大学院生・科目等履修生の方は、単位が揃った時点で資格が取得できます)

また、科目をとり始める年には、必ず4月上旬に開催される「博物館に関する科目履修ガイダンス」に出席して、所定の手続きをしないと履修が開始できません。ガイダンスや単位修得にかかわる事務室からのお知らせは、**原則大学ポータルサイト「G-port」**上に掲示されます。見逃さないように！

博物館に関する科目および履修年次
(参考:令和7年度)

	博物館法施行規則 による科目	本学の対応授業科目	単位	履修年次	修得単位数
必修 科目	生涯学習概論	★ 生涯学習概論	2	1～4年次	19 単位すべて
	博物館概論	★ 博物館概論	2	2～3年次	
	博物館経営論	★ 博物館経営論	2	2～4年次	
	博物館資料論	★ 博物館資料論	2	2～4年次	
	博物館資料保存論	★ 博物館資料保存論	2	2～3年次	
	博物館展示論	★ 博物館展示論	2	2～3年次	
	博物館情報・メディア論	★ 博物館情報・メディア論	2	2～4年次	
	博物館教育論	★ 博物館教育論	2	2～3年次	
選択 科目	博物館実習	★ 博物館実習	3	4年次	最低2系列に わたり8 単位以上 ※各系列4 単位以上
	文化史	★ 文化史特殊講義 ★ 資・史料整理法	4 4	2～4年次 2～4年次	
	美術史	★ 美術史講義	4	2～4年次	
	考古学	★ 考古学	4	2～4年次	
	民俗学	★ 民俗学特殊講義	4	2～4年次	最低2系列に わたり8 単位以上 ※各系列4 単位以上
	自然科学史	★ 自然科学史	4	2～4年次	
	物理	★ 力学基礎1 ★ 電磁気学1	2 2	1年次 1年次	
	化学	★ 無機化学Ⅰ ★ 無機化学Ⅱ ★ 有機化学概論Ⅰ ★ 有機化学概論Ⅱ	2 2 2 2	1年次 1年次 1年次 1年次	
	生物学	★ 生化学1 ★ 生化学2 ★ 動物科学 ★ 植物科学	2 2 2 2	1年次 1年次 1年次 1年次	最低2系列に わたり8 単位以上 ※各系列4 単位以上
	地学	★ 地学概論Ⅰ ★ 地学概論Ⅱ	2 2	2～4年次 2～4年次	

★は博物館に関する特設科目

2 学芸員資格取得までの手続きの流れ

2年生で履修登録をし、その後3年生終了時までに、最低でも「博物館概論」・「博物館資料論」・「博物館資料保存論」・「博物館展示論」・「博物館教育論」の5科目の単位を修得し、指定のガイダンスへの出席と所定の手続きを済ませると、次年度4年生で「博物館実習」を履修することが出来ます。

この科目は「学内実習」(通年週1回の授業)と、「館園実習」がセットになった科目です。通年週1回の「学内実習」のクラスは現在、美術系、歴史系の2つに分かれ、15名以下の小人数クラス制となります。ちなみに、令和7年度は7クラス開設されました。クラス分けや実習先は学芸員課程委員会が決定します。

「館園実習」は、学習院大学史料館または学外の博物館・美術館・文学館などの現場で、1週間程度行われます。

この「博物館実習」を履修し資格を取得するには、以下の流れに沿って必要な手続きを踏みましょう。



2 年次

4月上旬

- 1 博物館に関する科目履修ガイダンス

4月上旬～中旬

- 2 博物館に関する科目履修申込

- ・「博物館に関する科目履修申込書」提出
- ・博物館に関する科目履修費(¥10,000)納入

※ 科目履修申込は、学部2年生以上から可能です。

- 3 G-portで今年度履修する各科目を登録

3 年次

4月上旬

- 1 G-portで今年度履修する各科目を登録

※ 「博物館概論」「博物館資料論」「博物館資料保存論」「博物館展示論」「博物館教育論」修得(3年次終了までにこの5科目の単位を修得していないと4年生で実習は履修できません。)

11月上旬

- 2 第1回博物館実習履修ガイダンス

12月初旬

- 3 博物館実習履修申込(仮登録)

- ・「博物館実習履修申込書(仮登録)」
- ・「特別ガイダンスレポート」提出

4 年次

4月1日頃

- 1 博物館実習履修有資格者の発表(掲示)「博物館実習」通年授業クラス分け発表

4月上旬

- 2 第2回博物館実習履修ガイダンス
- 3 博物館実習履修申込

- ・「博物館実習履修申込書」提出
- ・博物館実習履修費(¥5,000)納入

4～6月

- 4 館園実習先 が順次 決定

※ 履修に関する重要なお知らせは、原則 G-port 上に掲示されます。

5月頃

- 5 館園実習事前ガイダンス

5月～12月頃

- 6 学内外の各館園での館園実習

3月10日頃

- 7 博物館学芸員資格取得者発表(掲示)

3月20日

- 8 卒業式「博物館学芸員資格取得証明書」交付

館園実習にあたって

皆さんはこの広報誌や、先輩の話などを参考にし、学習院大学史料館で実習したいのか、それとも学外の館園で実習したいのか、その場合どのような館園で実習したいのか、などをよく考えておく必要があります。ただし、基本的には前年度博物館実習を受け入れてくださった館園以外で実習できる可能性は少ないですし、たとえば美術館では美術史専攻以外の学生はほとんど実習できないという現状もあります。また、実習を受け入れてくださる館園には限りがあります。

ありますので、すべての方の希望を叶えることは困難で、希望通りにならない場合が多々あります。その点はどうかご理解ください。

なお、帰省先などで縁故等があり、館園実習先を自分で探して依頼しようとする人は、心当たりの館と交渉を始める前に、必ず学芸員課程事務室に相談に来てください。理想と現実を踏まえて、「仮登録」をし、レポートを提出してください。そのレポートに基づき、委員の先生方が皆さんの実習クラス、実習館園を決定します。

令和7年度 博物館実習依頼館園

板橋区立郷土資料館
出光美術館
上野の森美術館
NHK放送博物館
永青文庫
大田区立龍子記念館
葛西臨海水族園
霞会館記念学習院ミュージアム
鎌ヶ谷市郷土資料館
鎌倉国宝館
神奈川県立近代美術館
川崎市立博物館
川崎市立美術館
江東区芭蕉記念館
江東区深川江戸資料館

国立科学博物館
古代オリエント博物館
埼玉県立近代美術館
埼玉県立川の博物館
埼玉県立歴史と民俗の博物館
渋谷区立松涛美術館
新宿区立新宿歴史博物館
杉並区立郷土博物館
世田谷区立郷土資料館
台東区立書道博物館
たばこと塩の博物館
千葉県立美術館
千葉市美術館
ちひろ美術館・東京
東京国立博物館

東京都江戸東京博物館
東京都公文書館
東京都現代美術館
東京都写真美術館
東京都美術館
東京都埋蔵文化財センター
戸田市立郷土博物館
栃木県立博物館
鳥取県立博物館
とみおアーカイブ・ミュージアム
富山県水墨美術館
那珂川町馬頭広重美術館
豊田市美術館
中野区立歴史民俗資料館
長野県立美術館・東山魁夷館
中山道広重美術館
横山大観記念館

卒業生の主な就職先

国立

お礼と切手の博物館
宮内庁書陵部
九州国立博物館
京都国立博物館
皇居三の丸尚蔵館
(旧宮内庁三の丸尚蔵館)
国文学研究資料館
国立新美術館
国立西洋美術館
国立歴史民俗博物館
しょうけい館
東京国立近代美術館
東京国立博物館
東京大学史料編纂所
東京文化財研究所
文化庁 など

公立

愛知県芸術文化センター
愛知県陶磁美術館
愛知県総務部文化振興局振興課
秋田県立博物館
安野光雅美術館
板橋区立美術館
茨城県近代美術館
井原市立平櫛田中美術館
今治市村上海賊ミュージアム
(旧村上水軍博物館)
入間市博物館
いわき市物来関文学歴史館
江戸川区教育委員会
江戸川区郷土資料室
O美術館
大磯町郷土資料館
大分県立歴史博物館
大阪府立弥生文化博物館
大阪市東洋陶磁美術館
大阪市立美術館
大田区立龍子記念館
神奈川県立神奈川近代文学館
神奈川県立近代美術館
神奈川県立歴史博物館
金沢21世紀美術館
鹿沼市立川上澄生美術館
鎌倉文学館
川崎市立美術館
川崎市市民ミュージアム
キッズプラザ大阪
熊谷市役所埋蔵文化財担当
群馬県立歴史博物館
江東区芭蕉記念館
神戸ゆかりの美術館
埼玉県立近代美術館
埼玉県立文書館
佐賀県立名護屋城博物館
静岡県立美術館
品川区立品川歴史館
島根県立美術館
白根記念渋谷区郷土博物館・文学館
新宿区教育委員会
杉並区立郷土博物館
世田谷美術館
高井鴻山記念館
高浜市やきものの里かわら美術館
多摩六都科学館
千葉市美術館
秩父市教育委員会
千代田区立日比谷図書文化館
土浦市立博物館
東京都江戸東京博物館
東京都公文書館
東京都現代美術館
東京都写真美術館
東京都美術館
東京都埋蔵文化財センター
戸田市立郷土博物館
栃木県立博物館
鳥取県立博物館
とみおアーカイブ・ミュージアム
富山県水墨美術館
那珂川町馬頭広重美術館
豊田市美術館
中野区立歴史民俗資料館
長野県立美術館・東山魁夷館
中山道広重美術館
横山大観記念館

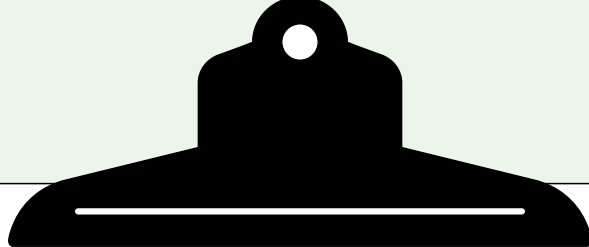
私立

アーティゾン美術館
(旧ブリヂストン美術館)
出光美術館
上野の森美術館
永青文庫
MOA美術館
岡田美術館
太田記念美術館
霞会館記念学習院ミュージアム／
学習院大学史料館
鎌倉考古学研究所
鎌倉市芸術文化振興財団
軽井沢ニューアートミュージアム
軽井沢千住博美術館
河鍋曉斎記念美術館
切手の博物館
ギャラリー・タイセイ
サントリー美術館
サンリツ服部美術館
渋沢史料館
相国寺承天閣美術館
城西大学水田美術館
女子美術大学美術館
昇仙峡ローブウェイ七宝美術館*
静嘉堂文庫美術館
泉屋博古館東京
浅草寺
センチュリーミュージアム*
そごう美術館
SOMPO美術館
竹久夢二伊香保記念館
通信総合博物館*
東京藝術大学大学美術館
徳川記念財団
徳川美術館
徳川ミュージアム(旧彰考館)
徳川黎明会
土佐山内家宝物資料館
難波田龍起・史男記念美術館
ニューオータニ美術館*
日本銀行金融研究所貨幣博物館
名古屋ホストン美術館*
箱根ガラスの森美術館
島山記念館
原美術館ARC
(旧原美術館／ハラミュージアムアーク)
平木浮世絵美術館
物流博物館
細見美術館
ポーラ文化研究所
前田育徳会尊経閣文庫
松岡美術館
三井記念美術館
三菱史料館
目黒雅叙園美術館*
森美術館
弥生美術館・竹久夢二美術館
陽山美術館
流通経済大学三宅雪嶺記念資料館
箱根ラリック美術館 など

海外

上海博物館

・上記の館名等は卒業生の就職時の名称の場合があります。
*の付く館は現在閉館しています。



information

☑ パートナースHIP&キャンパスメンバーズ 学習院大学は博物館と連携しています 学生証をもって博物館にでかけよう！

学習院大学では、学内に博物館指定施設である霞会館記念学習院ミュージアムを設置するほか、科学技術や美術・歴史などに対する皆さんの関心を高めることを目的として、学外の博物館と下記の提携を結んでいます。各館の窓口で学生証を提示すると、常設展が無料で観覧でき、一部の特別展・企画展が割引になるなど、さまざまな特典があります。

連携や特典についての詳細は、学内担当部署学芸員課程のHP <https://www.gakushuin.ac.jp/univ/curator/index.html> や、各館HPの連携専用ページをご確認ください。

連携名称と対象となる博物館

- 東京国立博物館キャンパスメンバーズ: 東京国立博物館
- 東京都歴史文化財団パートナーシップ: 江戸東京博物館・現代美術館・写真美術館・庭園美術館・都美術館・江戸東京たてもの園
- 国立科学博物館大学パートナーシップ: 国立科学博物館
- 国立美術館キャンパスメンバーズ: 東京国立近代美術館本館・国立工芸館・国立映画アーカイブ・国立西洋美術館・国立新美術館

※ 入館に事前予約が必要な場合があります。観覧にあたっては、各館のHPを必ずご確認ください。



東京国立博物館 本館外観
画像提供 東京国立博物館



同 本館5室(武士の装い)
画像提供 東京国立博物館



国立科学博物館 外観
画像提供 国立科学博物館



同 フタバスズキリュウ
画像提供 国立科学博物館

☑ 学芸員課程事務室よりお知らせ —— 各種証明書の発行について ——

学芸員資格に関して、以下の証明書を発行しています。

- 博物館学芸員資格取得証明書〈和文〉〈英文〉
- 博物館学芸員資格取得見込証明書〈和文〉〈英文〉
- 博物館に関する科目の単位修得証明書〈和文〉

・ 詳細は学習院大学HP「証明書の発行」をご確認ください。

<https://www.univ.gakushuin.ac.jp/life/issue/>



☑ 学芸員課程事務室の開室について

原則 月曜日～金曜日 9:30～17:30

(11時30分～12時30分は閉室)

土曜日 9:30～12:30

- ・ 開室日時は、原則として霞会館記念学習院ミュージアムと同じです。最新の開室情報は、霞会館記念学習院ミュージアム(学習院大学史料館)HP <https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua/index.html> から開館カレンダーを御確認ください。

『学芸員』No.29 表紙の写真

ミュージアムの建築は、モダニズム建築の旗手前川國男(1905-86)により1960年代に設計されたかつての大学図書館を、機能的な博物館施設としてリノベーションしたものです。この写真は、前川建築の特徴とされるコンクリートを打放しにした壁面を写しています。

広報誌『学芸員』のデザインについて

芸術を学び始めると、古代ギリシャ神殿の円柱や三角形の破風、四角い居住空間、ロシア・アヴァンギャルドやセザンヌらの円と三角と四角への分解と再構成、仙厓義梵の○△□など、さまざまな円・三角・四角に出会います。学生の皆さんが学習院の学芸員課程を履修する中で、教員・スタッフから基礎的な多岐にわたる円・三角・四角を学び、新たな自分の形(学芸員)を創造していく創造していく姿をイメージして、デザイン担当者はタイトルロゴを構想し、紙面レイアウトに展開しました。

学芸員 BULLETIN FOR CURATOR'S COURSE No.29

発行日: 2025年10月発行 発行者: 学習院大学 学芸員課程委員会 〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
霞会館記念学習院ミュージアム2階 学芸員課程事務室 TEL. 03(5992)1181 <https://www.gakushuin.ac.jp/univ/curator/>
デザイン・制作: 株式会社D_CODE

